

<b>Title</b>	巻頭言 知の共同体形成のために
<b>Author(s)</b>	大木, 雅夫
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.15-5, 2006.3 : 3-3
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4362">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4362</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

# 多様性に対する習熟

歴史の教訓とは前車の轍を踏むなかれとの教えだから、悪夢もまた貴重な教訓となろう。悪夢の中の悪夢は戦争である。しかも神は、敗者のみならず勝者にも甚大な犠牲を強いる。先の大戦の戦勝国は、歴史の教訓を謙虚に学んだ。敗戦国と手を組んで戦争のエネルギー源を共同管理とし、戦争の根源を絶つために共同市場を創出した。その後身EUは前途多難であろうとも、未来には美しい希望がある。しかし暑い夏に汗と涙を流した敗戦国は今、どこへ行こうとしているのか。政治指導者の驕慢と国民の無自覚は危険である。

歴史を顧みれば、統一国家は常に滅びた。フランス革命は、強大な王国を滅ぼして帝国を築き、ナポレオンは、35歳で皇帝になった。国王は殺され皇帝が現れた。フランスの国民は何のために血を流したのか。その大帝國も、今は第5共和政の国である。ドイツはどうか。くらげのお化けみたいな神聖ローマ帝国は844年も続いたが、ビスマルクの第二帝国もヒトラーの第三帝国もすべて亡びた。統一国家の運命はかくのごときか。

EUは違う。ヨーロッパ統合の動きは、ロマン・ゲルマン法族に属する仏独伊ベネリユックス6ヶ国に始まり、その後北欧、イギリス、東欧等異質的法族の諸国が加わり、今EU構成国は25国となった。ここで法の統一を考えれば、それはほとんど痴人の夢に近い。

ところで田中耕太郎の大著『世界法の理論』の刊行以来70余年、いま世界法を語る人はない。ナポレオン法典は日本を含む世界に継受の波を生み出したが、各国とも加工変容を加え、19世紀末には最大の対抗馬ドイツ民法典も登場した。塔の崩壊に似た状況は統一法や世界法の夢を甦らせたが、今は世界法もヨーロッパ統一法もほとんど語られない。

EUの目標は法の統一 (unification) ではなく、法の調和化 (harmonization) にある。そもそもEUのモットーは、「多様性において統一されたもの United in diversity」(EU憲法条約第1-6a条)である。それはおよそ全ヨーロッパ文化を特徴づける「多様性における統一性」(unité dans la diversité) とカルソー的連合 (association) の観念——誰もが個性ある顔を見せながら、両腕を伸ばして手を握り合うフランス・デモのような結合形態を目指している。悠久の歴史を背景とし、過ちを教訓としてヨーロッパとその人々はやっとここに到達した。

EUの連合歌はベートーヴェン第九にあるシラーの「歓喜の歌」である。EU3万3000人の本部職員は、「天上のものよ、時の流れが厳しく引き裂いたものを、あなたの魔力は再び結びつける」と油蟬の合唱をしているのではない。法統一の強行よりも法調和の熟成に、強引な単純化よりも複雑な多様性への習熟に向けて蟻のように働いている。無論私には、天上のもの「優しい翼が憩うところで、人はみな兄弟となる」との美しい夢が実現するか否かは知る由もないが、ヨーロッパがもはや引き返せない地点にあるのは確実ではないか。